第１６号　　情やま笑　上やま昇　常やま勝

# 上山小学校「風のたより」

令和５年１２月２８日（木）　校長　有谷孝彦

**学校経営目標：ふるさとを愛し、**
**自らの未来を切り拓く児童を育成する**

## 早くも令和５年がおわります！

猛暑に始まり、雪で終わる２学期でした。この２学期は新型コロナウィルス感染症の感染の勢いがやや治まってきたこともあり、様々な行事が復活しました。この復活による忙しさは、日常の大切さを感じるうれしい悲鳴でした。

夏の暑さが異常でしたので練習不足は否めませんでしたが、特に「諫早のんのこ祭り」での子どもたちの踊りや地域の皆さんの龍踊りはとても印象に残っています。

子どもの頃は、１年という期間は非常に長かったように思います。おそらく、乗り越える壁がたくさんあって、それを一つずつクリアしていくことがそう思わせていたのではないかと思います。大人は子どもに比べてチャレンジすることが少なく、長期にわたる困難な目標を立てるので、その焦りからあっという間の１年間になってしまうのではないのかなと考えます。

今年、私は一体何ができたでしょうか。人の役に立つ人間になりたいです。

そばにいたいよ
君のためにできることが
僕にあるかな

いつも君に
ずっと君に
笑っていてほしくて

ひまわりのような
まっすぐなその優しさを
ぬくもりを全部

これからは僕も
届けていきたい
ほんとうの幸せの
意味を見つけたから

「ひまわりの約束」抜粋
秦　基博

# 先　人　から学ぶ

「教師失格」　　江口　季好

四時間目、
子どもたちと運動場のまわりを歩いた。
「さっさと歩きなさい。歩くのがおそい子は、遠足に行けないね。」
わたしは、
子どもをせき立てて歩かせた。
この子はわたしに手をひかれて教室にはいった。

五時間目、
この子は詩を書いた。

ば　ら
ばらが　さいていました。
ふわっと　さいていました。
えぐちせんせいが
「はやくおいでよ。」
といいました。
わたしはずうっとみていました。

もう退職された校長先生から教えていただいた詩です。作者の江口季好さんは、佐賀県の御出身で、東京都で教職にあられた方です。私は、もっぱら詩を鑑賞する方で、創作の方はだめです。しかし、詩から学ぶこと、自分なりに解釈して生活に生かすことを心がけています。本編は、教職にあるものはもとより、大人として、人間として気付かされることの多い示唆に富んだ作品であると思います。私たちは神様ではありませんし、時には厳しく教え導かなければならない立場でもありますので、すべてを満たすことはできませんが、少しでも行動の裏に気付くことのできる心の余裕を持ち、寄り添うことができるようになりたいものです。

令和６年が皆さんにとって素晴らしい年になりますようにお祈りしております。(*^_^*)

☆上山小のＨＰ「スミレだより」毎日更新しています。ＱＲコードもご利用ください。